

# 工芸 愛海詩

えみし



琉球ガラス村  
(糸満市)

たいらつねお  
平良恒雄ガラス展  
～沖縄の海と風と光～

7月20日～8月22日

特別号 No.24

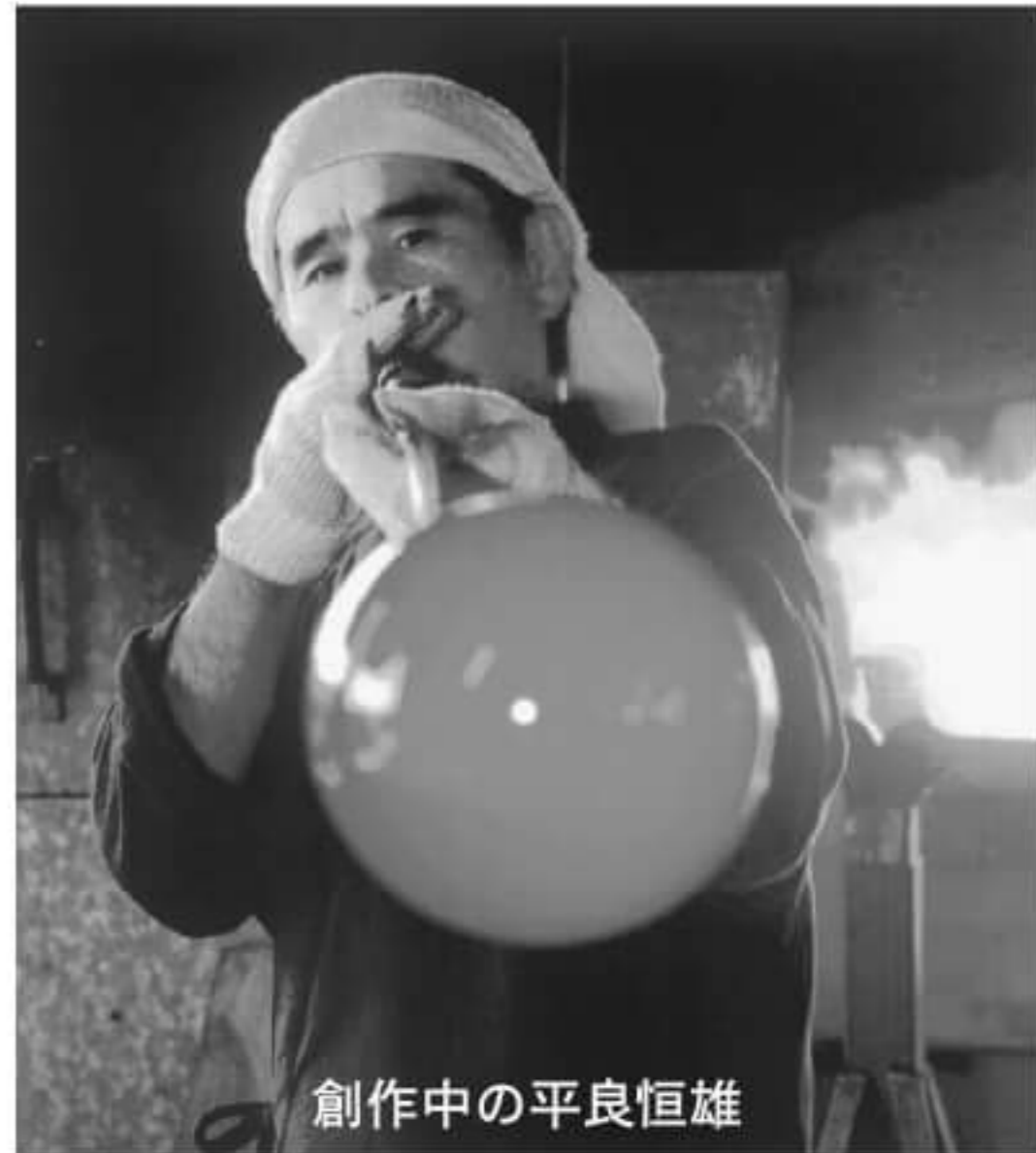
工芸・愛海詩の会  
会報

平成22年7月15日発行

編集発行人/工芸ギャラリー  
佐藤睦子

〒064-0821  
札幌市中央区北1条西28丁目2番17号  
TEL・FAX/(011)613-1112

WEBSITE  
http://www.emishi-s.com  
E-mail:kougei@emishi-s.com



創作中の平良恒雄

## 沖縄と名工

私には沖縄にかけがえない親友が一人居る。彼女は人として忘れてはならないものを持っており、しっかりと持っている。それは自然への畏敬であり、人への感謝であり、市井の人が持つ矜持であったりする。親友だけではなく、私の知っている沖縄の人々は皆、そういう気持ちを抱いている方が多い。長い歴史を継げば、時代に惹かれ、また時代に翻弄された嘆きもある。しかし人々は明るく、平気で生きる難しさを知っている。

沖縄にはそんな人々が紡ぐ、独特の文化がある。日本の文化の根本を知りたければ、まず、沖縄に行つてその文化に触れてみるのが良いだろう。工芸では織物、漆芸、陶芸、ガラス、その魅力は尽きない。

作り手を語るなら、(これは沖縄の作り手だけではないが)高い志を持って平気で生き、作品を作る人達の願いと祈りと感謝と矜持、名工の作品からはそれが確かに伝わってくる。銜いや気取りがなく、ただ、創るのがうれしいという...、大変だけれどうれしい、そんな気持ちで伝わる。そういう気持ちから生まれた作品は、すくっと美しいのだ。その思いはかならず受け手、お客さんに伝わる。

今年の夏は琉球ガラス名工、平良恒雄の作品で皆さんに、沖縄の風、海、光を伝えたい。

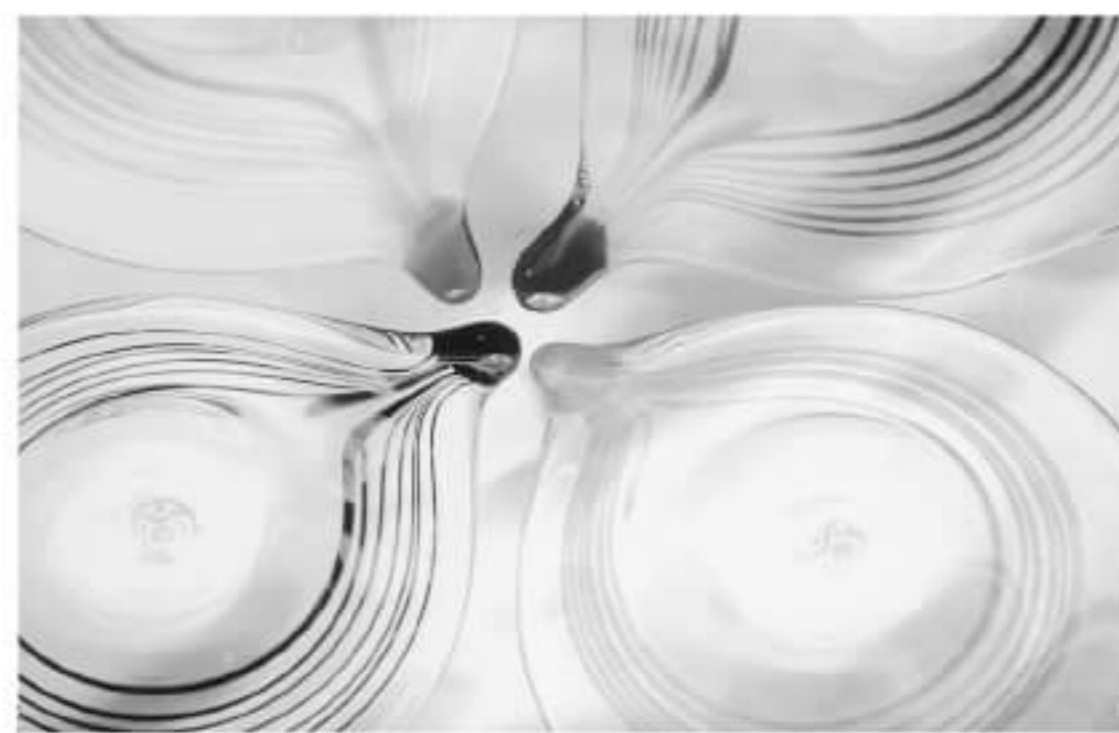
(佐藤 睦子)



真南風 3 っ足小鉢

約、14cm×10cm×高さ2.5cm

作品からはいろいろな色の涼風を感じる。吹く場所により色が違うかのよう。流れるようなふんわりした幾重もの曲線が優しく食材を包んでくれそうです。



真南風 小皿 約、直径14cm×高さ3cm



真南風 3 っ足小鉢  
約、直径14cm×高さ5cm

光と影の間に風が舞っているような小鉢。自然な風が与える至福の時を作品に感じる。やわらかいトライアングルで使いこちが楽しめます。



蓮の葉皿

(大) 約、直径24cm×高さ4cm  
(小) 約、直径16cm×高さ3cm

まるで蓮の葉の上に料理をのせているような感じですが、涼やかな作品、自在なセンスで遊び心で使ってみてほしい。光と呼吸するもえぎ色が美しい。

## 略歴

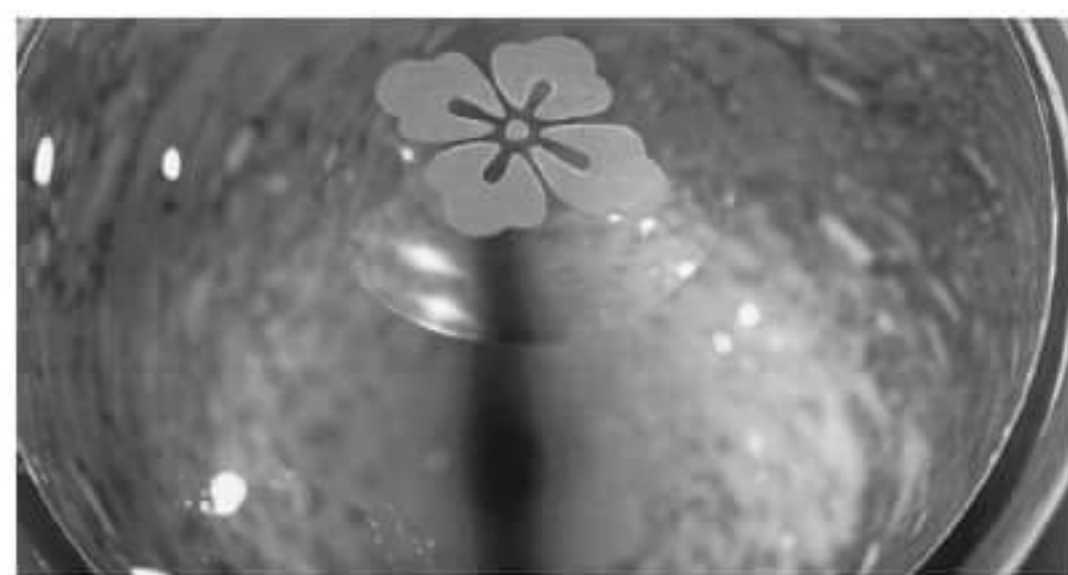
昭和23年	生まれ		
昭和61年	沖展	那覇伝統工芸まつり	沖展 賞
昭和62年	沖展	沖展	展 賞
昭和63年	沖展	沖展	展 賞
平成元年	沖展	沖展	展 賞
平成2年	沖展	沖展	展 賞
平成3年	沖展	沖展	展 賞
平成4年	沖展	沖展	展 賞
平成14年	沖展	沖展	展 賞
平成16年	沖展	沖展	展 賞
平成17年	沖展	沖展	展 賞
平成21年	沖展	沖展	展 賞
平成21年	沖展	沖展	展 賞

## 琉球ガラス

琉球ガラスの始まりは明治中期頃で約100年の歴史をもつ。最初は無色のガラスばかりで、ランプのホヤ、蠅取り器、油壺、薬瓶など生活の必需品を作っていた。

それは終戦まで続いた。戦後は駐軍米軍人らの需要意向の影響が大きく、廃瓶をリサイクルすることで廃瓶そのものの色を出した、工芸としての琉球ガラスが生まれたのである。現在は廃瓶を利用したガラス作りはほとんどなくなった。現在の琉球ガラスの種類は主に、ソーダ石炭ガラスである。主原料はケイ石60%、ソーダ灰20%、石炭10%、泡切剤、着色剤等が10%。

- 技法一 宙吹き法。型吹き法。
- 加飾技法一 被せガラス (ガラス素地は重ねあわす)
- 斑文溶着ガラス (ガラス原料を直接つける)
- 箔溶着ガラス (金銀の箔を使用)
- 泡ガラス (発泡剤を使用)
- カットガラス (ガラスを直接カットする)
- サンドブラスト (砂を吹きつけて仕上げる)



伊勢神宮への奉献作品 「瑞海」

平成21年4月に奉献する。蓋物の器、蓋をとって中を見ればそこには南の海を思わせるなんと吸い込まれそうな色が広がる。愛海詩でレプリカをご覧ください。

琉球ガラス村で約35人の職人を束ねるガラス職人、平良恒雄の作品展、工芸ギャラリー愛海詩では4回目である。花器、食器、オブジェなど約50点を展示する。平良は沖縄の自然を捕らえ、作品に写し取る。自然への憧憬、祈りの中で、作品に昇華させる。愛海詩で初めて平良の作品展をした時、平良の作品との出合いで自身の人生を定めた人がいらした。この時期、私は平良の「深海シリーズ」を食卓で使う。その度、楽しく、わくわくするのだ。だからそういう人がいらしても理解できる。自分の感性がよくなる、平良の作品にはそういう魅力があるのだ。今回新作の「真南風シリーズ」も楽しい。高い技でよく風の動きを捕らえている。使い易い形で器の中の風は涼やかだ。昨年、「深海シリーズ」の蓋物が伊勢神宮に奉献された。この伊勢神宮には全国の名工、人間国宝らの作品が納められており、沖縄県では初めての奉献である。長い年月、こつこつと積み上げてきた努力が1つ報われたような気がする。

ガラス作品作り一筋に46年、平良の精神と技の作品展、それは作品そのものが何よりも雄弁に平良自身を語るだろう。

## 挨拶

この度で三回目となる「愛海詩」

さんでのガラス工芸展は、私にとっても非常に楽しみでもあり、この機会を特別に感じております。ご縁を特別に感じていただき、この機会を与えてくださった佐藤様にはとても感謝しております。また沖縄と同じく雄大な自然を有する地で育った北海道の皆様方にも、沖縄のおおらかな、深くそして明るい自然を写した作品をとおして、少しでも沖縄を感じていただければと思っております。

十六歳からガラス作り一筋でここまで四十六年が経ちました。未だにガラスと向き合う時は日々葛藤し、ガラス作りの奥深さを感じております。昨年の四月に伊勢神宮に奉献する機会に恵まれ、一三〇〇年も脈々と受け継がれている日本の魂の故郷に私の作品をお納めすることができました。これも先輩方から受け継いだ技術を継承し、自分なりに鍛錬しガラスと向き合ったこと、お客様からの励ましの言葉があったこと、つながったことと思っております。これを機に身の引き締まる思いで、どう後輩達に技を引き継ぐかにも力を注ぎたいと思っております。

沖縄に生まれ育ち、南国特有の夏の暑さがありますが、私が好きな季節でもあります。沖縄の夏は南から吹く季節風を真南風(または「え」と呼び、木陰に入るとその真南風の心地よい風は涼しさを運んでくれるからです。昨今の地球温暖化で異常気象となつてきているように、季節も変わってきているように感じます。この当たり前に感じているこの風を後世につなぐのも私たちの役目だし、この沖縄の自然の風を守りたいという思いから、「真南風」(または「え」というシリーズ)を作りました。

ガラスに巻いた線にも一つ一つ微妙な巾の違いがあり、この線に道具で動きをもちたすことにより、風の流れを表現しております。暑い夏に吹く真南風を感じながら、涼しさをお客様にも感じていただけると嬉しいです。

この作品展を通じて、北海道のお客様とのふれあいを感じられることはものづくり職人にとって非常に嬉しい限りです。遠くはなれた地域の方々に沖縄の海と風を届けることができるといふ思いで作品を作りましたので、是非ご覧下さい。

(平良 恒雄)